

宗晃 茶人としての松下幸之助

PHHP総合研究所
取締役 第一研究本部担当

谷口全平

1 案内

櫻雲霽々彌生の好季節、心なき鳥すらも友呼びかはすにひとり茶の湯の道のみ好事の天地に踟躕するは採らず、ひろく公衆に友を求め茶道の真髓を傳へねばならぬいま、新しく提唱されて居りますPHHP運動の「繁栄によって平和と幸福を」求めようとする考へ方は、心に雑念を去り身に能率的な所作をつけて、生活に合理的な豊かさを持ちたい茶道の立場からも心から同感出来ると存じます。

この意味からこのたび左記によりPHHPを協賛する大茶會を催し皆様一日の御清鑑をお待ちすること、致しました。緑風櫻花に丹葉をまじへ萬里莊の風情も一人と存せられま

す。では非の御枉駕を御願申上げます。

PHHP昂揚 国民文化大茶會

主催 社団法人大阪茶道會
後援 大阪府 大阪市

日時 四月二十六・二十七日土・日九時～四時

會場 北河内郡枚方町 萬里莊京阪枚方西口下車山手二丁

終戦直後のPHHP昂揚大茶會

昭和二十二年四月二十六、二十七日の両日、大阪茶道會（矢野宗粹理事長）は大阪府枚方の萬里莊でPHHP昂揚のための大茶會を催した。両日は快晴に恵まれ、招待客約百人、一般客約六百人、計約七百人が野点に、あるいは表、裏、武者小路の各千家、そして煎茶の席で茶を楽しんだが、松下幸之助はそこでPHHP研究所が目指すところを、六回、それぞれ約一時間にわたって訴えた。

松下が「物心一如の繁栄によって平和と幸福を（Peace and Happiness through Prosperity）をスローガンに、PHHP研究所を設立したのは、その前年の十一月三日のことであった。太平洋戦争直後の極度に混乱した世相の中で苦しむ人々の姿を見て、「これが万物の霊長といわれる人間の姿なのか。いや、そうではあるまい。人間には本来、繁栄、平和、幸



「真々」茶室にて

福を招来する能力が与えられているはずだ。人間の本质とその本質に則った社会のあり方を衆知に教えを請いつつ探究し、よりよい社会をつくりたい」と考えたことが設立の動機であった。そして、やむにやまれぬ気持ちから機会があればどこへでも出向き、その願いを懸命に訴えていたのである。ちなみに、昭和二十二年の一年間をとっても二百四十回ほどの講演、懇談を行なっている。

お茶との出会い

松下のお茶との出会いもこの萬里荘においてであった。もともと萬里荘は田中車両(株)社長・田中太介氏の所有で、山を含めた約四千坪の広大な邸宅であった。田中氏は明治九年生まれ、松下より十八歳年上で、大正九年、兵庫県の尼崎市で「田中車両」昭和二十年十一月、近畿日本鉄道(株)に経営権を譲渡、近畿車輛(株)となったのを創業、大を成した経営者であった。その田中氏が、強い信念を持って活躍する松下に早くから注目し、大阪工業会の常議員に推薦するなど何かと支援をしていたという。

昭和十二、三年のことである。萬里荘でお茶会が行われた。そこにたまたま松下も呼ばれていたのだが、若くして成功している経営者ということで、正客の席に誘われた。しかし、阪急電鉄の小林一三氏などから、「お茶くらいたしなんでおいたほうがよいよ」と言われていたものの、松下はお茶のたしなみがなく、恥ずかしい思いをする結果となった。田中氏から、「松下はん、商売だけではいかに。日本文化も知らなアカン」と言われ、田中氏の紹介で、そ

会社でいえば、非常勤の取締役といったところであろう。

茶室はPHP研究の道場

松下は、松下電器の再建に全力を尽くすため、昭和二十六年より月刊『PHP』誌の発行のみにとどめ、PHPの活動を一時中断していたが、会長に就任したのを機に、同三十六年八月、京都東山麓真々庵で研究を再開した。真々庵は約千五百坪、数寄屋づくりの建物と東山を借景にした池泉回遊式の庭で成り立っていた。

庭は明治から昭和にかけて活躍した名作家・小川治兵衛の手になるもので、ある財界人から購入したときにはかなり荒れていた。それを、池を広げたり、灌木を間引いたり、「根源の社」やお茶室を新たに作り、自分好み

の席に来ていた大阪茶道会理事長・裏千家流矢野宗粹氏に茶道を習い、京都の茶道具商・善田昌運堂店主、善田喜一郎氏に道具を世話してもらったことになったのである。

昭和十四年、松下が兵庫県西宮市に、十二年に着手し建設を進めていた自宅・光雲荘が完成した。その茶室「光雲」の茶室開きに、松下は裏千家十四代家元・淡々斎宗匠夫妻を招いた。これが、松下が正式な茶事を行なった最初であった。松下は、このときのことをこう記している。

「茶を習ったといっても、もとより本式ではなく、茶の精神も、点前も作法もまことに未熟なものであったので、人を招き、その上茶道の家元を客にお迎えするということは、一大事ともいってべき出来事であった。万事はお茶の先生におまかせし、私はあやとり人形のようなもので終始したものである。当時宗匠は四十五歳くらいで、すでに大匠としての風格を備えておられたように記憶する。亭主役として私はおそるおそるお茶をたてたのであるが、接してみても肩の荷がおりたような暖かい感じがした。家元といいかめしさはどこにもなく、場の雰囲気をつましく作られて、その場を穏やかに誘導される……その姿が極めて自然で滋味あふれるものがあり、四時間にわたる行事やお話の間に、私は素人ながら茶の精神というものを、おぼるげながら知ったのである」

これ以降、松下は淡々斎宗匠の弟子として、また一ツ年上の尊敬する友として、親交を重ねることになる。

昭和三十三年十一月、裏千家で家元淡々斎により老分推戴の式がとり行われた。そこで松下は裏千家の老分職につき、同時に茶名「宗晃」を受けている。ちなみに老分とは、

に手を入れている。

お茶室をつくったのは昭和三十八年。六月五日に行われた地鎮祭では、茶室をつくることの意義についてこう読み上げている。

「そもそも真々庵はPHP、すなわち繁栄によって平和と幸福とを実現するための道理と方策を究めるべく縁あって私どもに与えられたいわば天与の道場であります。したがって、この真々庵の一木一草にいたるまでもすべてこれ自然の理法の現れと見、そこから素直に謙虚に学び取る態度をもって私どもは日夜精進を重ねていのであります。いまこの一隅に立てられる茶室もまた真々庵に与えられているこの尊い使命の一環をなすものであります。ことに日本古来の伝統によって育まれた茶の道には限りなき先人の教えが含まれております。この茶の道を味わいつつ時に瞑想し、時に清談することによって私どもはこの上なき心の安らぎと潤いとそして勇気を与えられることと信じます。その意味において、これはPHP研究の道場であり私どもが真理に思いを馳せつつ心を養うための精進の場であるとも申せましよう」

この茶室は同年十月に竣工し、松下はこれに「真々」と命名した。この一畳台目向板入り二畳の茶室は裏千家今日庵の写しであるが、西面が壁ではなく障子になっている。

松下は真々庵に来るとまず「根源の社」の前で手を合わせ、あるいは時には座禅を組み、しばらく瞑想にふけていたが、その後は必ずこの茶室に入りお茶を飲んだ。そのときまさに影のように付き添っていたのが一ツ年長の矢野宗粹氏であった。



松風 < 湯の煮え立つ音 >
釜の湯が煮え立つ音が松の木を
わたる風の音に似ていることか
らそのようにいわれる

松下は晩年、ある講演会で、「経営者は孤独なものであり、愚痴の言える相手を持つ必要がある。自分には幸いなような人がいた。戦前は加藤大観師、真言宗の僧侶であり戦後は矢野宗粹氏であった」と述べている。研究会を行なった客人と会うのはお茶を飲んだ後であった。

歴史学者・トインビー博士の驚き

松下は、真々庵で内外のさまざまな客人と会った。それらは、お得意先、財界人、学者、宗教人、芸術家とさまざまであったが、お茶席を共にすることも多かった。

昭和四十二年の秋、イギリスの世界的に著名な歴史学者・アーノルド・J・トインビー博士夫妻が来訪されたことがあった。松下はお茶を呈し、しばし歓談の時間を持ったのであるが、そのときトインビー博士はお茶を飲み、大自然の縮図ともいふべき日本庭園を見ながら、おおむね次のように言われた。

「日本の経営者はすごい。轟音のすさまじい工場や競争の激しい厳しい世界であつただしく仕事をしながら、一方でこのように静かな世界を持つている。静と動、静かに考えて、積極的に行動する、静と動を行き来することによってそこから誤りのないエネルギーが湧き出るのでないか。日本の驚異的な経済発展の一因もこんなところにあるのかも知れない」

筆者は当時月刊『PHP』誌の編集部員であつた。二人の対談を雑誌に掲載するため、横についていたので、そのときの博士の驚きを鮮明に覚えてい

茶道は素直な心への道

松下はPHPの研究を始めたとき、地球やそこに生まれた人類の歴史を概観して、「かぎりない繁栄と平和と幸福とを、真理はわれわれ人間に与えている」と直感した。しかし、現実には、人間は貧困に苦しみ不安に悩んでいる。その原因は、「人知に捉われて、真理をゆがめているからだ」と考えたのである。

つまり、人間には本能や感情がある。あるいはそれぞれにさまざまな体験を持っている。それらにともするとらわれ、真理・実相を見失いがちなのがわれわれ人間である。真理を松下は天地自然の理とも宇宙根源の法則とも言うていたが、だからこそ、お互い何ものにもとらわれない素直な心になつて真理に順応するよう努力し、より住みよい豊かな社会をつくるうと訴えていたのである。松下は素直な心についてこのように述べている。

「素直な心といふのは、何か一つのものにとらわれたり、



A.J.トインビー博士をお見送りする

松下にも次のような文章がある。

「戦国時代の武將はこのほかお茶を愛好した。殺伐な動に対して茶道の「静」。物に対する心というか、物心一如というか、古来日本人は生活態度の中にその両面を求め、「動」が激しければ激しいほど、「静」を愛した。「静」に徹するとき、ものに動じない心の落ち着きが生まれてくる。変を聞いてなお沈着している茶人の心境は武芸の達人のそれと通ずるものがある」

だから、「茶などやる暇はない」と言う財界人こそ、茶の道に入る必要がある。「この道に入ることによって生まれる心のユトリ、これが必要だ」と言うのであつた。

一方に片寄つたりしない心である。いわゆる私心なく、ものごとをありのままに見る心である。そういう素直な心になれば、ものごとの真実の姿、実相というものが見えてくる。したがつてまた、何をなすべきか、何をなすべきではないかということも、あやまりなく判断できるようになる。だから私は、素直な心というものは、人間を正しく強く聡明にするものだと考えている」

茶道の精神は「和敬清寂」という言葉に表されると言われているが、松下はこれが素直な心に通じていて、PHPが目指すところとも合致すると言つた。

「数百年の伝統を持ち、その間ずっと心の落ち着きを養つてきた茶道というもの、お茶の心というものには、素直な心に通じるものがあるように思っている。お茶室におけるいろいろな心づかい、お茶室の静寂なたたずまい、あるいは一服のお点前の中に、何か非常に心が洗われるというか、その心とときには、ふだんなかなか持てないでいる心の落ち着きというものがごく自然のうちに得られるような感じがするのである。そういう意味では、私にはまだまだ深いものはわからないが、茶の心というものは、とらわれない心であり、ありのままに見る心であり、いつてみれば素直な心そのものではないかという感じも一面にしている」

PHP研究所が真々庵におかれていた頃、松下が所員にお茶を習わせたのも、二十世紀の日本を担う指導者を育てるために昭和五十五年に開塾した松下政経塾の力りキラムの中に茶道を入れたのも、動じない心、素直な心を養つて欲しいという願いからであつたらう。



「真々」茶室の前で

お茶室を寄贈する

松下は、お茶を愛した。そして毎日のようにお茶室に入った。「お茶室に入ったときの気持ちほど楽しいときはない、といつてもいいほどの和やかな安らぎ、余裕を感じさせてくれる」と述べているが、善田昌運堂現社長・善田征男氏の証言でも、松下は西宮の自宅で夫人とお茶室に入ったときはいつも人が変わったように非常に機嫌がよくなったという。そこは、世間の騒がしさ日常のわずらわしさから離れて、心休まる空間だったのである。

松下は、「お茶というものは和敬清寂の精神を持っていて

茶道具よりお茶の心

お茶を愛した経営者の中にも茶碗や水差し、あるいは掛け軸など道具に執着した人、その反対に道具にはあまり関心がなかった人があったという。前者は美術品に対する眼力とこだわりのある人で、たとえば三井の大番頭・益田孝、安宅コレクションで有名な安宅産業の安宅英一、荏原製作所創業者・畠山一清、出光興産創業者・出光佐三等々がいたという。松下は後者であった。善田氏が高価な茶器を勧めても、「わしは美術品の値打ちが分からんのでな、もつたいたいなわ」と言ったり、値段を聞いて、夫人に、「善田はんのこの道具、高いな。これに比べると、われわれの電気製品は安いもんな。しかも、どんどん安くなくなっていくわ」と笑っていたという。

昭和五十八年、NHKが「絵巻切断」というドキュメンタリー番組を放映したことがある。それは秋田の藩主佐竹家が所蔵していた「三十六歌仙絵巻」の、放出後の流転を追ったものであった。鎌倉時代に描かれたその絵巻は第一次世界大戦の後に放出されたが、美術品として国宝級、あまりにも高額で買い手がつかない。そこで当時の財界のドン、益田孝が大胆にも絵巻を切断、一枚ずつを当時の資産家たちが買い受けた。それは茶室の掛け軸として最適であった。しかし、第二次世界大戦など激動する日本経済のなかで、初期の所有者の大半が手放し、新しい所有者の手に渡っていったのである。

松下のところにも、昭和三十年代に、「さ雄鹿の朝立つ

るけれども、その精神というものは、お茶室というものと相まって生きてくるものだと思う」と、茶室の間取りやにじり口のしつらえなど、茶道の精神を生かすための工夫に感銘を受けている。

松下は、いろいろと問題の多い混迷の世の中において、お茶室を建て、茶道を広めていくことは、素直な心を広め、日本人の精神文化向上のためにも意義があるし、お茶室建築の伝統・伝統美をありのままに残すという意味でも大切なことだという思いから、請われるままにいくつかの茶室を寄贈してきた。

昭和四十年三月に竣工した高野山金剛峰寺の真松庵から始まって、京都国際会館の宝松庵、中尊寺の松寿庵、和歌山城の紅松庵など十一の茶室である。その後が、同六十年四月に完成した伊勢神宮の神宮茶室であった。敷地面積、約五百六十坪、茶室面積、約百七坪のまことに立派なものであった。そのとき松下はすでに九十歳になっていた。

松下が伊勢神宮にもお茶室を考えたのは昭和四十年九月、伊勢神宮崇敬会会長に就任したときであった。しかし、日本人の心のふるさとともいえるべき神聖な伊勢神宮である。畏れ多いことといささか遠慮をしていた。ところが、同五十六年、大宮司二條弼基氏より「神宮に茶室を寄付してもらえないか」という申し出があった。建設候補地も五十鈴川にかかる宇治橋を渡ったすぐ左の河畔、ここなら場所として最適だと考え、実現したのである。このとき松下が茶室建築の第一人者、棟梁の中村外二氏に依頼したことはただ一点、「三百年以上保つ茶室をつくって欲しい」ということだけであった。

野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露」の歌とその作者・大伴家持を描いた一枚が回ってきていた。松下がNHKから取材を受けたとき、「自分はこんなものを持っていたんやな」とつぶやいている。

このエピソードが示すように、松下は道具にはこだわっていなかった。それより、お茶の持っている精神性を大事にしていたのである。だからこそ、みずから名器を集めるのではなく、茶室の寄贈を通じて茶の湯の深さをみんなに知ってもらおうとしたのであろう。それは素直な心やPHPの精神を普及しようというのと相通することだったのである。

ただ、お茶人という人は茶器や美術品に詳しい人と世間一般に思われているだけに、松下は、お茶について新聞や雑誌の記者に聞かれると、照れながら、「茶人でもなんでもないんですよ。本当のこと言うたら恥かくだけやな。『なんや、松下さん、茶人や思つたら何も知らんやないか』となつて、さっぱりわややな。松下さんは無茶人であるということですか」と笑って答えていた。

松下は趣味として、ゴルフ、清元、碁、将棋なども誘われるまま始めたことがある。しかし、どれも長続きはしていない。けれどもお茶だけは違った。松下にとつてお茶は企業経営やPHPの研究と並ぶ人間探究の一つの道だったのではなからうか。



たにくち・ぜんべい
昭和十五年京都市生まれ。三十九年慶應義塾大学経済学部卒業。同年PHP総合研究所に入所。出版部長、『PHP』編集長を経て、五十八年研究所部長。著書に『松下幸之助 運をひらく言葉』(PHP研究所)がある。